

---

# らき すた ~ Beautiful Days ! ~

森羅万景

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

らき すた〜 Beautiful Days!〜

### 【Nコード】

N5260F

### 【作者名】

森羅万景

### 【あらすじ】

いつからかそれが当たり前になっていたけど、ボクにとってこの学園の暮らしはとても充実している。一人暮らしたから色々大変だったりするけど、みんなと過ごすこの時間はとても幸せで、暖かくて、笑顔に満ち溢れている。何より 『たけるくん! はやくはやく〜!』 さあ、一緒に行こ? とても美しくて、不思議で、おかしくて、楽しい日々へ

## 0 いま、始まる（前書き）

この小説は美水かがみ先生原作の『らき すた』にオリジナルキャラクターである『乃木坂 たける』を加えてお送りするほのぼのコメディ小説です。

二次創作を嫌いとする方は閲覧をご控え下さい。

## 0・いま、始まる

乃木坂 たける、本年度より兼ねてからの希望である一人暮らしを叶え現在は自宅の自室で引っ越しの準備を行っている真っ最中である。

季節は春。それは麗らかで暖かく、柔らかな日差しと風が新しい始まりを告げる季節。

生命の萌芽と、終了。嬉しさと悲しさの入り混じる、そんな季節。

たけるは最低限の荷物をダンボールに詰めてそれを業者の人と一緒に大きなトラックの中に運搬していく。思いでの詰まったダンボールも全て詰め込み終え、たけるは業者に一礼をしながらそれを見送った。

「ふう〜……」

自室に戻るなりたけるはベッドにダイブ。うつぶせから仰向けに寝転がりながら体勢を変えて天井を眺める。

「……一人暮らし、かあ……」

それは兼ねてからの夢。

もちろん、家族との繋がりが嫌になった訳ではない。  
この歳の少年になら訪れる自立心からの行動である。実際に行動  
することがたけるが他の少年たちとは違うところだが。

むくり、と半身体を起こして家具の少なくなつた自室を見渡す。

「あはは……こんなに広がったんだ、ボクの部屋って」

一人ごちて、ため息。

と、ドア越しの廊下からトタトタと足音が聞こえた。

少しして、控えめなノックが数回。

「お兄ちゃん……入っていい？」

「心結？ いいよ」

ノックと同じく、ためらいがちに開かれた扉の向こうからはたけ  
るの妹である乃木坂 心結<sup>みゆ</sup>が入ってきた。

たけると同じ明るい茶髪の地毛は後ろでひとまとめにしてあり、  
いわゆるポニーテールになっている。

少し垂れ気味の目はたけるをまっすぐ見つめていて、窓から差し  
込む光を受け止め夜空のようにキラキラと輝いている。

が、少し悲しみの色も混じっている。

「……心結、寂しい？」

「……うん……寂しいよ」

幼い頃からずっと隣に居た優しくて信頼出来る人が側から離れて  
しまつとなれば、心結の心情をたけるは悟れた。

だがこれはもう決めたことで、今更後戻りは出来ないし、するつもりもない。  
だから、

「心結、おいで」

ベッドの右隣を手で叩き、心結を呼ぶ。

心結はうつむいたままトコトコとたけるに歩み寄り、ベッドに腰を下ろした。

たけるはそんな妹の頭を少し強めに撫でる。

「ごめんね……。でも、サヨナラってわけじゃないから心配は要らないよ。きっと大丈夫、やっていけるから」

「うん……うん……」

二回の頷き、最初は兄に、もう一つは自分に言い聞かせるように心結は頷き、ポロリと涙を流した。

「なっ……泣くなよ心結」

「な、泣いてないよっ」

からかいのニュアンスを含んだたけるの言葉に顔を赤くして心結は立ち上がり扉の前まで小走りにかけていく。

そして扉に手を掛けて一言、

「お兄ちゃん」

「ん？」

「行ってらっしゃい！」

「……うん、行ってきます」

まだ出発まで時間はあるんだけど、とは言わないでおいだ。

時刻は昼の少し手前。簡単な昼食をとった後たけるはスポーツバツグを肩に背負いこみ玄関先に立っていた。

「気をつけて、着いたら連絡を入れるのよ？」

「うん、大丈夫だよ母さん」

「お兄ちゃん……」

「心結、行ってくるな。また夏休みにでも帰ってくるから」

そんなやりとりをしたのが、昨日のことである。

らき すた〜 Beautiful Days〜

「ん……」

たけるが目を覚ますとそこは見慣れない天井だった。  
数分の間茫と意識を泳がせて、呟く。

「そうだ……昨日は疲れて寝ちゃったんだ……」

家族と別れた後、綾桜学園のある某県へと向かいバスや電車を乗り継ぎ、ようやく着いたアパートで待っていたのは数こそ少ないが

引越しの荷物の詰まったダンボール。

それを片付けている最中に眠気が限界に差し掛かり布団を敷いて眠ってしまったのだ。

枕元に置いてあるデジタルの目覚まし時計の時刻を見れば早朝六時。昨日は確か深夜の一時辺りに眠ったはずだ。

(……なんで休日に限って早起きが出来るんだろう？ しかも目覚まし無しで)

もともと寝坊癖のあるたけるにとってそれは兼ねてからの疑問である。が、くだらないな、と早々に割り切って体を起こす。

ベッドではなく布団、しかも畳に直に敷いたので体が少し痛んだがこれ位は慣れで何とかなるだろうと活を入れて起き上がり伸びをする。

と、腹が鳴った。

「あはは……昨日のお昼からなにも食べてないっけ」

苦笑を漏らしつつまずは腹ごしらえか、と考えスウェット姿のままポケットに財布を突っ込み、ふと窓の外を見た。

まだ少し早いような気もするが、桜の花びらが雪のように花弁を舞わせていた。

扉を開くとやや危ない歪んだ音を立てた。

築六十年になるこのアパートは風呂・キッチン・トイレ付きで十二畳一間、家賃は六万円きっかり。

一人暮らし、更には高校生が生活するとなればやや厳しい条件ではあるがたけるの胸にある新しい生活への期待や緊張の前ではそれは差して重荷にはならなかった。

「……あ」

扉を閉めようとして、たけるは口を開く。  
誰も居ない、簡素な部屋に向けて、

「行ってきます！」

## 1・エンカウントはコンビニで

「ふわあ……暖かいなあ……」

ぼつりと呟きつつたけるは大きな伸びをする。早朝だが春の麗らかで草花の萌芽を促すような柔らかく暖かい風はたけるの前髪を揺らし吹き去っていく。

アパートを出て歩くこと数分で目的地であるコンビニの看板が視認出来る。その立地を見越してあのアパートを選んだのだ。

自炊も出来るが、やはりコンビニが近くにあれば楽だ。今朝のよくに食材がないならば尚更。

用意周到である。

コンビニ内に入るとやはり早朝とあってか、あまり人は居ない。人混みが得意ではないたけるは少し胸を撫で下ろしてカゴを手にとる。

朝食を買うのもそうだが、お菓子や飲料も今揃えておこうと考えた。どうせ昼にはまたデパート等で食材を買い揃えるつもりではあるが、

（コンビニってだけで何か色々と買いたくなるんだよね……魔力だ、魔力）

適当におにぎりやパンをカゴに投げ入れながらそんな思考を回し、お菓子のある場所に行くと小さな少女が立っていた。

(……女の子？　こんな時間に珍しい……)

その少女を思わずマジマジと見つめてしまう。

背は低い。目測で百四十と少し。薄い茶色のコートを着込んでいる。そして顔に目がいく。

あ、可愛い。

無意識の内にそう思うほど少女の顔立ちは整っていた。幼さが前に出た童顔、横顔しか分からないが目はやや半目気味でその下に無きぼくろがついている。長い長い青色の髪に、ちゃんと伸びた触覚……いわゆるアホ毛。

(こんな時間にコンビニに居るなんて珍しいな。旅行かなんかかな？)

そう考えつつ次に少女の手に目が行く。

カゴを持つ右手にはおにぎりとパン、スポーツ飲料が入っていて、さらにお菓子が何品か。

左手には某機動戦士00の食玩を持っている。

(ん？　そっち系なのかな)

たけるはどちらかと言えば『あっち側』の人間だ。普通の人よりアニメや漫画を趣味として、音楽もアニソンに傾倒しがちになる。本人はあまり気にはしないが、まあ、いわゆる『オタク』である。

（そういえば二期はいつからだっけ……もう始まってっけ？）

自分の琴線に触れない作品のことはおざなりになる辺り、微妙に入りきれていない節もある。

と、その少女がやおらパッケージを振り始めた。

（あ、やっぱりそうするよね……）

思わず苦笑してしまったたけるだがその少女は食玩に集中しているようで気付かなかった。

やがて二、三回同じ動作をした後少女は二番目に振っていたそれをカゴに入れ満足そうに鼻息を漏らしてレジに向かって行った。たけるには目も暮れず。

「……ボクも買ってみようかな」

そう一人ごちてたけるは食玩を適当に一箱手に取り、レジに向かう。

たけるがレジに向かうと現在レジを打っているのは一人だけで、時間帯が時間帯なのでまあ妥当と感じた。

バックルームにあと二人くらい居るだろうが。

たけるの前、要するに今会計をしている少女が金額を言われて財布を取り出す。

「……あれ？」

少女がコートのポケットから財布を取り出した段階で動きが固まってしまった。そしてもう一度金額を店員に確認して、財布を覗き込む。

その動作を繰り返すこと数回、たけるは気付いた。

そして、

「あの、よろしければお貸ししますよ？」

「ほえっ？」

少女が振り向き、たけるの顔をマジマジと見つめた。そして視線を下ろしたけるの手に握られた野口英世を見る。

「や、悪いですから。いいですよ」

やや高い、ソプラノボイス。幼い雰囲気のある舌つ足らずな声が遠慮がちに耳朵を打つ。

「いえ、お金が足りないんですね？ お気になさらずどうぞ」

「はあ……どうも」

たけるの笑みに負けたのか、少女は会釈をしながらたけるの手から英世を受け取り、店員にも謝辞を述べつつ渡し会計を済ませる。お釣りとレシートを受け取った少女はレシートをチラリと眺め、たけるに渡して一言。

「わざわざすいません、後でお返しするんで……」

（この歳で、ずいぶん礼儀の正しい子だなあ……）

身長からするに小学生、或いは中学の一年程度と推測される少女に軽い会釈を返し、たけるも会計を済ませる。

「どうも、すいません。ありがとうございました」

コンビニを離れ帰宅路を歩む最中のことである。話を聞いて分かったがこの少女はここ近辺の一軒家にすむ少女らしい。

ATMを使つて下ろした英世を渡しながら少女は少し悪びれた笑みを口元に浮かべている。対するたけるはそれに笑顔で返す。

ついでなので途中まで一緒に行き、と少女に言われて先ほど来た道を逆に歩いていく。

そうだ、とたけるは思い口を開き、

「あの、自己紹介がまだでしたね。ボクは乃木坂 たけると言います。ここには昨日来たばかりで……」

「あ、ご丁寧にどうも。わたしは泉 こなたって言います」

少女、泉 こなたはヒラヒラと手のひらを振りながら、

「えと、お引越して来たんですか？」

「はい。実家は東北なんです、今年から綾桜学園に通うことになりましたので」

「今年から綾桜？　じゃあ同い年で同じ高校だ！」

「……へ……？」

今、この方なんとおっしゃった？

同い年……？

「えっ……え？　えええ！？」

たけるは思わず奇妙な声をあげてこなたを驚愕の目で見る。

「な、なんかとっても失礼な反応だね……」

（いや、だって、こんな小さな子がボクと同い年だって？）

たける自身背丈が高いほうではない。むしろ同年代の男子と比べれば小柄で細身である。

まあそんな自分はさて置いて、どこからどう見てもこなたの小ささは異常と言えた。

「ちょっと、たけるくん絶対失礼なこと考えてるよね？」

「え、いやいや、そんなこと……えっ、と……」

嘘をつけないたけるはしばらく頬を朱に染め顔を伏せる。

「……すいませんでしたあああ！」

「うあっ！ ビックリしたっ！？ いきなり大きな声出さないでよ  
お」

同い年と分かったためこなたの口調はタメ口だ。  
それから少しして、こなたから許しをいただいたたけるは問う。

「あの、よろしければ綾桜学園の通学路を教えてもらっても大丈夫  
ですか？」

「ん〜？……正直面倒だけど、いいよっ」

多少本音を漏らしつつこなたは二つ返事で承諾し、こっちだよと  
言っや否や歩き出した。

その後をたけるは追いかけて、

（……泉 こなたさん……か。お友達になれると良いな……）

「たけるくん！ 早く早く〜！」

「あ、待ってください〜い！」

## 1・エンカウントはコンビニで（後書き）

ちょっと急ぎ足過ぎたかな？ と多少不安ではありますがとりあえずプロローグ部分は以上になります。

次回からは綾桜学園入学式になります、お楽しみにっ！

## 2・さくらひらひら（前書き）

のっけから誤字です……。

×綾桜

陵桜

ええ、申し訳ないです（・・・）

では本編へ〜。

## 2・さくらひらひら

月日が流れるのは早いもので、たけるがこなたに会ってから早一週間が経過した。

現在は無事、陵桜学園の入学式を迎えた次第である。

そんな入学式当日、たけるはやはりと言つべきか緊張で固まっていた。

「……………うあ、体が……………」

なにもしていないのに自然と震える。もともと緊張すると動けなくなる厄介な性格をしているため今朝から朝食を食べる動作に落ち着きがない。左手で持った箸がカタカタと震え、それが味噌汁の入った椀に当たり奇怪な音を奏でる。

ちなみに今朝の献立は豆腐とワカメの味噌汁に白飯、ベーコンに目玉焼きにサラダのシンプル且つオーソドックス且つオールドタイプの和洋折衷メニューである。

八時半から始まる入学式、電車を使った登校になるので早めにセツトした目覚ましではあったがいかなせん早過ぎた。

六時手前、早過ぎる朝食であつた。

「ふう……」

朝食を食べ終え、後片付けも済んだところでたけるはざっと自室を見渡す。

一週間前に届いた荷物はすっかり片付き、自分色に部屋は染まっていた。

ベッドを持ち込むと間取りに余裕がなくなるため準備した布団は現在部屋の押入の片隅で三つ折りにしてある。外に干したいのだがそれは休日の時間がある時にしか出来ないだろう。

冷蔵庫と食器棚は一人暮らしなのでサイズは小さめ。

テレビも実家で祖父から譲り受けた小さいものを選んだ。その画面からはニュースキャスターがにこやかな笑みで花見のシーズンが近づいていることを知らせている。

四月の末は、たけるの十六歳の誕生日だが今はその話はおいておこう。

窓枠から外れるギリギリの位置にはデスクトップのパソコンが置かれており電源が入ってメールボックスを移している。たけるが現在座布団を敷き腰を下ろす卓袱台には入学案内のプリントが置いてある。

それを眺めながら茶を啜り、パソコンを少しいじりメールチェックをする。

「あつ、泉さんからメールだ……」

イスに腰掛けメールを開く。

『はろはろ』

今日は待ちに待った陵桜の入学式だねっ

たけるくんと同じクラスになれたらいいね

でさあ、今朝なんだけど一緒に行かない？ お父さんが一昨日か

ら仕事の都合とかで居なくてさゝアシが無いんだよねゝ

じゃ、返信か電話待ってるよ。

ばいにゝ  
』

一週間前、ほんの一週間前に出会った小さな少女、泉 こなたからのメールである。

なぜたけるがこなたのアドレスを知っているのかという話は一週間前に遡る。

こなたが先導をしつつ今年から三年間通うことになる通学路をたけるは歩き、初めて見る景色に首をひたすら左右に振り続けていた。実家に居たころはこんなに家屋や店舗が密集していることはなかった。一番近いお隣さんの家でもたけるの自宅から徒歩で三十分、デパートは車を使わなければならないほどの田舎だった。

ただ、それでもわりと裕福な家庭だったため苦労することはなかったが。

「えっと、泉さんはなぜ陵桜に行こうと？」

何か話さなければいけないような空気に呑まれたので無難にたけるは問う。

「んゝ、いやぶっちゃけた話だけど別に高校なんてどこでもよかっただよねゝ」

「え、じゃあなんでわざわざ……」

陵桜学園の敷居はこの辺りでは一、二を争うほどに高い。高校に興味がないのなら一般の公立校でよかったはずだ。

その問いにこなたは目を細めながら、

「いやね？ お父さんが学校のランクに合わせた条件を出してきてね。陵桜だとパソコンとDSって言ったからわたしにしては珍しく頑張ったんだゝ」

「え……はあ」

（……なんか、上手く言えないけど、それでいいのか泉さんのお父さんー！）

「そついうたけるくんは何で東北からこっちに？ 一人暮らしまでして」

「ボクは……んゝ、一人暮らしに慣れてたって言いますか、両親や妹やおじい様から離れて一人で生きていけるか……試したかったからです」

「ふゝん、妹さんが居るんだ？」

そこに食いつくか、思わず突っ込みが出かったが止め、頷く。

「可愛いのか？ 写メとかないのか？」

妹、という単語に異常なまでの反応を見せこなたはたけるに詰め寄る。

「あの、近い……」

「たけるくん、こんなに可愛い顔してるからね。妹さんもさぞかし萌……可愛いんだろうなあっ」

（今、なんかアブナイワードを言いかけた！）

気がつけばこなたは後数歩でたけるに抱きつける位置まで歩み寄っていて、上目遣いがたけるの顔を赤く染める。

こなた本人は気付いていないが。

「いや、ボク、携帯まだ持ってなくて……」

実家に居た頃はとくに必要がなかったが、ここに越してくるにあたって母親から携帯を買うように言われていた。もう高校生なんだし、とよくわからない理由で。

「へ？ 持っていないのか？ めずらし。そんなんじゃこの時代は生きてけないよっ！」

断言された。

「あの、パソコンならあるんですが……」

「それとこれとじゃまるで違うつて。携帯出来るか出来ないかで需要は大きく変わるものだよたけるくん」

こなたが今にも情報化社会に対する演説を饒舌に語り始めるような不穏な気配を感じたので、たけるは強引に話題を変えることにした。

「まあその話は置いて、泉さんはこんな朝早くからなぜコンビニにいらしたんですか？」

「ちょっと話の切り替えが強引だね。好感度が下がったよ」

手痛いダメ出しを言って、

「ちょっと昨日から徹夜でネトゲしててねっ。小腹が空いちちゃったから気分転換を兼ねてコンビニにでもくっつてとこだったんだよ」

「はぁ……」

（……徹夜でネトゲって、女子高生にあるまじきようなそうでないような）

苦笑し、それっきり言葉を発さなくなったたけるを怪訝な顔で見つめるこなたであったが、

「ねえたけるくん、良かったらアドレス教えてよっ」

「アドレスですか？」

たけるはしばし顎に指をやり考えるフリをして、首を縦に振った。

口頭だけでアドレスを伝えたので届くかは一抹の不安のまま始発電車に乗りしばし徒歩。そして陵桜校舎前に辿り着いてたけるは感極まった。

「うわぁ……ここが陵桜かぁ……」

そう特筆すべき特徴があるわけではない、至ってありふれた外観の校舎。

だがはるばる東北からやって来ただけあってその感動にも似た感情は計り知れない。

「あっはは、そんな嬉しそうな顔することないのに」

「そ、それもそうですけど」

はらはらと舞い散る桜と、小さな少女。  
それが始まりだった

「つと……送信っ」

回想を巡らせて少し、不安も杞憂に終わったこなたのアドレス宛に返信メールを打ち、送信。

準備を始めるには頃合いの時間になったのを確認して制服を手に取り袖を通す。

シンプルな詰め襟だが未だ着慣れず、袖を通しただけで体が高揚するのが分かった。

「これでよしつ、と……」

ちらりとテレビに視線を移すと時刻はいい感じだったので、たけるは手早く洗面所に足を運び、何となく鏡に向き合ってみた。

男の割には長めの、明るい茶髪に垂れ気味の柔和な瞳。

柔らかい線の輪郭に目鼻。一見すれば高校生には見えない。見えないが、今年から間違え無く乃木坂 たけるは本年度の陵桜学園新入生である。

未だ実感が沸かなかつたが制服に身を包むと自然に体がこわばってきた。いや、朝からガチガチではあったが。

「……ふう〜」

短く深呼吸。

始まる、いよいよ。三年間、長いようで短い高校生活が、始まる。

その三年間で自身はどれだけの思い出を作れるのだろうか？

また、友人たちと過ごせるだろう？

そんな思考を弄びつつ、たけるは居間に戻り鞆を引っ付かんで玄関へ。スニーカーの靴紐を固く結び、よし、と活をいれる。

「行ってきますす！」

朝靄が微妙に辺りに充満した道を、たけるは早い歩調で歩き出した。

目指すは、陵桜。

その前に、こなたの指定した待ち合わせ場所。

「あ、たけるくん！ こっちだよぉ！」

家を出て数分歩いただろうか。たけるはこなたとのメールで指定された場所、いつだかのコンビニがすぐそばに見える通路を歩いていて、その最中こなたの声が聞こえた。

視線を前に向けると陵桜の女子制服に身を包んだこなたが嬉しそうな笑みを浮かべ手をぶんぶん振っていた。その幼い少女のような振る舞いに笑みをこぼし、手を振り替えてこなたに走り寄る。

「お早うございます、泉さん」

「おは らっき」

そしてくだらない他愛ない雑談に笑顔を交え、二人は歩き出した。

電車に乗り、一度だけ通っただけなので未だ新鮮味の強い桜吹雪の舞う道を歩きながら、たけるはふと思った。

「そういえば、陵桜って生徒は総勢で何人くらいいるんでしょう？」

「さぁ？ でも聞いた話によると結構な数いるみたいだよ？ クラ

スも一学年で十とか……」

「はあゝ。それはまた最近の少子化にそぐわない……」

陵桜はマンモス校としても有名である。偏差値は高いため比較的に成績優秀者が多数にのぼるが例外的にたけるのように越境して入学を希望する者も僅かではあるが居る。

実際は地理的な要因やその他諸々で断念する為仮合格者が無事入学するという越境入学希望者には本末転倒な事態にもなったりするがあえて閉口する。

「十クラスですかあ……多いですね」

そんなに沢山のクラスがある中で果たして自分は何組に配属されるのだろうか。

そんな期待や不安が顔に出ていたのかこなたの顔に満面の笑みが浮かんでいた。

「いやあゝたけるくんって男の子のくせしてなにげに萌えパーツを兼ね備えてるね」

「え？」

「ドジッ子、天然、優しい、可愛い、エトセトラエトセトラ……多分紙に書いたら八十枚は使えるね！」

何故かその視線に不逞で不純なものが混じっている。その細められた視線に居心地の悪さを感じたたけるは苦笑し、なるべく悟られないように何か別の話題がないか頭を捻らせる。

（昨日のテレビ番組の話題は？ いや、泉さんは主に深夜アニメくらいしか観ないと言ってたなあ……。最近ゴタゴタしてたからボクが分かんないや。

ゲームやマンガも然り……。

……あれ？ 泉さんと話す話題ってかなり偏ってる気が……）

「たけるくんや、なに考えてるのか分かんないけど帰っておいで」

こなたの声にハッと気付くと、そこは最寄りの駅付近だった。実際に視認できる位置だ。

考えすぎて周りが見えなくなっていたらしい。

「すみません、ちょっと考えごとをしてまして……」

「んー、それはすごい集中力だね」

と、こなたの足がピタリと停止。その場で腕を組み唸り始めた。

「あれ……別のことをしながら違うこと考えるって、それは集中力ないってことなのかな？ あれ？ どっちだ？」

大いに混乱していたが電車の時間が押しているとあってその話題は一時中断。結局陵桜までの道のりは集中力について語り合うだけだった。

一週間前にみはずの陵桜学園の校舎だったが、それは入学式とあつてかこの前に見た時とは外観が若干変わっていた。

陵桜学園入学式、と墨痕鮮やかに記された大きな看板が設置され、さらに本格的に咲き始めた桜の花びらがより雰囲気を醸し出しているからだ。

たけるが辺りを見渡せば、本年度の入学者で賑わいを見せている。その新入生徒の顔は幼さが少し残っていて、これからの始まりに皆顔が輝いていた。

「あ……」

ひらひらと、桜の花びらがたけるの目の前を落ちていく。それを、無意識に手を伸ばし掴む。

桜の花びらは、一瞬だけ光を放った気がした。  
暖かな、柔らかな、そんな光を。

## 2・さくらひらひら（後書き）

はい、遅筆には定評がある作者です。

なんだか自分的にはまだ書き足りないかなあとか考えたりしたんですがあまり長すぎても飽きるかなあと思いここまでにしました。

携帯小説（実際はパソコンでも見れるみたいですが）はスラスラ行ける読みやすさが大事だと思ったんで……。

さて、いよいよ次回はこなた以外のあのお馴染みメンバーが登場です！

さらには原作一巻にはまるで存在がなかった背景コンビも！？

……え、出すの？

次回更新は早くて再来週、おそくて来年です（笑

### 3 ・クラス分けは別フラグの伏線（前書き）

大変長らくお待たせしてしまいました。  
あとがきにてお詫び + 次回予告です。

### 3・クラス分けは別フラグの伏線

入学式が始まる前にたけるとこなたの二人は、クラス分けが記された紙の貼り付けられた掲示板、他の新入生たちが放つ初々しさのあるフレッシュな空気の中に紛れてそれ眺めていた。

「えっーと泉、泉はつと……」

「乃木坂、乃木坂……」

別に二人して、互いの名字を口に出して探す必要は無いのだが、案外精神的な面で幼さが残る二人である。仕方がないとも言えなくも無いことも無きにしもあらずと言ったところだ。

「あつ！ あつた！ ありましたヨ！ 泉こなた、本日より一年B組でえ御座います！」

たけるの隣で背伸びをしていたこなたが、大声に敬礼をプラスしてたけるの肩を掴む。たけるは自分の名前をまだ見つけていなかったで、とりあえずB組の方の掲示覧を見てみる。

しばし沈黙。とは言っても他の新入生たちは騒いでいたが。とりあえずたけるとこなたは静かに『乃木坂』の姓を探す。

「んん……無いですね……」

気落ちしたような溜め息混じりに呟いたたけるの肩をポンポンと叩きながら、こなたも少しばかり落胆の色を表情に滲ませて溜め息を吐き出した。

同じクラスになれたらいいねっ。

朝に見たメールにこなたはそう記していた。それが叶わなかったことに寂寥感を感じつつたけるは掲示板を眺める作業を再開した。

「のーぎーさーかー……あっ！ あった！」

そう言ったのはこなただ。E組の覧を眺めていたたけるも釣られて、こなたが指差すそこを眺めた。

「C組、ですか。お隣になっちゃいましたね」

「んー、ちょっと残念だけどコレばかりはどうしようも無いからねえ。まあ、いつでも遊びに来てくれたまへー」

クラス分けも確認したので、帰りは一緒に帰ると約束をして互いのクラスに入っていた。

そして、自分の出席番号の書かれた席に座ったたけるはキョロキョロと辺りを見渡してみる。

少数ではあるが早くもグループが形成されていて、一人だけ出遅れた感が否めない。やはりこなたのように人懐っこさと愛嬌があっ

て、多少馴れ馴れしい程度でなければ友人とは作りにくいものなのだろうか。そんなことを考えつつ、だからといってその輪の中に入る勇気もなく、ただただ時間の中で解決すればいいなあ、なんて呑気に考えていた。

テンプレートと呼ぶに相応しい、恙無い分淡々とした味気なさのある入学式も終わり、たけるの初の今日の学園生活はここまで。短かったなあなんて感慨は所詮、終わってみてからの感想だった。

結局今日は誰とも話すことなく終わってしまったのが残念だったといえは残念だ。自身の隣を歩く小さな友人、こなたもそれは一緒だったらしく早く親しい友人が増えたらいいね、なんて話しながら歩く帰り道だった。

「そついえば泉さん、明後日から実力テストらしいですね」

「ふおっ！？ マジですか！ 聞いてないよっ！」

「ええー……？」

### 3・クラス分けは別フラグの伏線（後書き）

はい、ここまで読んでくださった皆様、まずは長らく更新停滞をしていたことをお詫びさせていただきます。申し訳ありませんでした。

と言うのも、現在進行形で作者はスランプと言いますかいい感じの文章が書けないんですね。クスリとくるギャグも織り交ぜることのできない阿呆っぷりです。ええ、申し訳ない。

ま、作者の弁明なんて聞いてても仕方ないと思うんで次回予告的な催しでも。

今回はつかさ、かがみ、みさお、あやのの四人が新たに登場します。時期的にみゆきさんは学園祭まで登場しない予定です（笑）

では、次更新は一日でも早くなるように努力致します。

#### 4・色づき始めの色彩

入学式こそ緊張やら何やら入り混じった感情のせいなのか、なかなかクラスメートとの親交を深めるようなアクションが出来なかった訳ではあるが、一週間も経てばそのピリピリとした空気はいくらか弛緩された。

実際、たけるも自分から誰かに話し掛けたり、或いは誰かに話しかけられたりと友人作りの行動を起こせるくらいには学園生活に慣れ始めていた。

とは言ってもまだまだ入学したての、右も左も分からないようなものだ。移動教室の場所が分からなかったり時間割が把握出来なかったり色々と迷う事もある。

そんなアレやコレは、総じて『楽しい』という感情を抱ける日常の一部となりつつある実力テスト明けのとある日。

例によってたけるはこなたと一緒に通学路を歩いていた。

「やー、テストなんてどうなるかと思っただけど案外なんかなるもんだね」

そう樂觀的に語るのはこなた。長い髪を風に揺らしながらゆったりの歩みで隣を歩きたけるに言う。

「あはは……ちゃんと勉強しなくちゃダメですよ」

この何日かで分かった事なのだが、こなたはどうやら勉強が苦手らしい。

いや、苦手と言うか生理的に受け付けないうで、一夜漬けは当たり前。提出課題は誰かのを写し（今回はたけるをお願いした）、教科書類は無論、置き勉強だ。

ダメ人間の鏡だな、とツツコミを入れてくれるような人間は、まだ登場していない。

たけるは何回か諫めたことはあるがこなたの独特な受け流しに負けて、とりあえず注意するだけに留まっている。

「ね、たけるくん。友達は出来た？」

「ふえ？　そうですね……話はよくするようになったけど友達って呼べるような人はまだ……。泉さんは、ご友人が出来ましたか？」

「いんやー？　たけるくんと同じような感じー。あつ！　でも先生とは仲良くなったよ！　黒井先生って言うんだけどね」

今朝の情景は、そんな感じ。

その日常風景が、より一層の色彩に彩られるようになる瞬間は、人それぞれにあるものである。

例えば、たけるたちの場合は

「んむ？　ねえたけるくん、あれ」

いつものようなありふれた会話の最中、ふと視線を向こうにやっ  
たこなたが指を指した。たけるもそちらを見やる。

「あれ？　あの制服、陵桜の方ですね」

「うん。あの子、確か私のクラスの子だよ」

向こう側に立っていたのは、淡い紫色の肩を越えるか越えないか  
程度のボブカットにリボンをカチューシャ代わりに付けた小柄（こ  
なた程ではない）な女生徒。それとも一人。背の高いタンクトッ  
プからむき出しになった腕は筋肉が隆々と猛った外人らしき男性。  
その外人が女生徒に身振り手振りのジェスチャーで何かをしてい  
る。

ただ、こなたの視点からみると、それはあたかも『得体の知れな  
い怪しい外人が女生徒に詰め寄っている』ように見えていた。

「……たけるくんや、何やらアレは助けなきやいけないような気が  
してならないよ」

「え？　いや、そう見えなくもないですけど……」

あれは、外人の方が何かを尋ねているんじゃないでしょうか？

そして泉さん、何でクラウチングスタートの体勢をとってるんですか？

と、たけるが言おうとするよりも早く、こなたは弾丸のように飛び出した。ソニックムーブなんて目じゃ無いぜ！　とでも言いたくなるような素早さだ。青いハリネズミの姿が一瞬たけるの頭を横切った。

「　　って、泉さん！？　何をっ！」

何をする気なんですか？　問う間も惜しい。たけるは一拍遅れてこなたの後を追いつけた。律儀にこなたが投げ捨てたやたら軽い鞆を回収するのを忘れずに。

柊つかさは、大変に混乱していた。

朝、双子の姉である柊かがみが日直だから、と自分より早く陵桜へと行ってしまったので珍しく一人で登校をしていた道中、いきなり後ろから声をかけられたのだ。

違和感があったのは、そのかけられた声だった。

普通ならば

「スイマセン」や

「あのう」等声をかけられるのが常なのだが、今し方かけられた声

は明らかに違和感バリバリだ。

「Sorry？」

「ふえ……？」

道端に咲くタンポポを眺めてほんわかとしていたためか気の抜けた第一声を放り、振り向く。

そこには

「ふ、ふえっ……？」

見るからに怖そうな細い瞳に無骨な輪郭。顎に点々と生えた無精<sup>ぶしょう</sup>髭<sup>ひげ</sup>が体感的怖さに拍車をかける。拍車をかけると言えば、その百九十はあるだろう大柄な体躯。

「station？」

身振り手振りを交えながらその男はつかさに何かを伝えようとしているのだが、すっかり混乱しているつかさの耳には、よく分からない英語で何か語りかけられている、程度にしか理解出来なかった。(station？ え、駅、だよ……。何だろう……。道でも聞いているのかな。でもでもっ、もしかしたらアブナイ人なのかもしれないよ……。このままだと、た、食べられちゃうかも)

常識のラインが、遙か右斜め上辺りをサマーソルトした思考しか

回らない。知らず知らず瞳に涙が溜まってきた。

「う、うう……」

お姉ちゃん、じゃなくてもいい。誰か、助けて

瞬間、男が吹っ飛んだ。

それと一緒に威勢のいい高めの声。

「イナズマキイイック！」

何かなんだか分からない……。

つかさがとりあえず状況整理をしている間に突如現れたその何者か　長い長い青髪を春風と跳び蹴りの余韻で靡なびかせるひどく背丈の低い、陵桜の制服を着た少女。

つかさは、その少女に見覚えがあった。

（あの人……同じクラスの、泉さん、だっけ……？　何でここに……）

暢気に考えて居ると、散々フルボッコにされた外人が涙目でこなたに頭を下げていた。どうやら負けを認めたらしい。

……いや、まず、勝負してたのかな？

「はあっ、はあっ……。……あ、い、泉さん！ 何をしてるんですかっ！」

「ふええ？」

また知らない声だよう……。

本格的に泣きたくなくなってきたつかさが伏せていた顔を上げれば、そこには制服からするに陵桜の、少年が息を切らしながらこなたを羽交い締めにして抑えていた。

長い明るい茶髪の髪に柔和そうな線の細い輪郭。背はやや低く、細身で華奢な体型なのが制服を通していても分かる。

少年 たけるだ。

こなたは知っているが、つかさはたけるとは面識が無いのでまたまた混乱していた。

「離してお兄ちゃんっ！ ソイツ殺せないっ！」

「ネタが古いですよっ！ それに殺しちゃダメですっ！」

現状整理。

オロオロしつつ涙目なつかさ。

ジタバタしつつ暴れまわるこなた。

そのこなたを抑えつつ頭痛を覚えるたける。

いきなりフルボッコにされた外人男性。

問１．コレは何ですか？

A．カオスです先生。

『えっと、大丈夫ですか？』

『な、なんとか……』

『ああ、もう！ 本当にスイマセン！』

『いやいや、元はと言えば自分が悪かったんで……』

『とんでもないです。ところで、何があっただんです？』

『駅に行きたかったけど場所が分からなかったから、丁度歩いていた子に道を聞こうとしたら泣き出してしまって……どうしたのかと考えていたら突然蹴られて殴られて引っ張られて引っかかれて……』

『……………』

カオスと化した空間からある程度脱出したたけるが外人と交わした会話である。ちなみに、全て英語である。

たけるが考察すると、要するにこなたの勘違いによる先走りが悪いのだと分かった。自分がもう少ししっかりしていれば、何とかなつたのかもしれないが今となっては分からないので泣きなくなってきた。

とりあえず、外人に十分な謝罪と駅までの道を教え、たけるたち一行は陵桜への通学路を歩いていた。

「えーっと、つかささんだっけ？ さっきはゴメンね、ややこしくしちゃって」

しおらしさを感じさせない緩い笑みで手を頭の後ろにやりつつ謝るこなた。まさに『エヘヘ、サーセン』と言った感じだ。  
対するつかさはこちらこそゴメンナサイ、と苦笑。

「あ、たけるくん。この子はウチのクラスの柊つかささんだよ」

「あ、えとつ、初めまして、柊つかさです」

「ああ、こちらこそ初めまし　あうっ！」

つかさとたける、同時に頭を下げたものだから、互いの頭を衝突させた。

ふむ、似た者同士だねっ。とはこなたの思惑。

「あれ？　柊さんって、どこかで聞いたような……」

「あ、それは多分、お姉ちゃんのことです」

「ふむ？　双子？」

「はい。お姉ちゃんは『柊かがみ』って言うんですけど……」

そう言えば、自分のクラスにそんな名前の人が居たような気がする。と言つか、後ろの席の人だった気がする。

なんて考えながら、たけるは新しい知人が増えたことに喜びを感じていた。

その日の夜。  
柊家にて。

「」  
「」

「ん？ どしたのつかさ、やけに機嫌いいじゃない？」

「あ、お姉ちゃん聞いて聞いてー。今日ね、新しいお友達が出来たんだー」

居間、嬉しそうに語るつかさの向かいで座ってテレビを見ていたつかさと同じ髪色の長髪をツインテールに結った少女、柊かがみは親愛なる妹つかさが今日あった出来事を嬉々と語る様子を見て、満足そうに微笑んだ。違うクラスになった時は人見知りが激しく、尚且つ天然な節があったつかさが上手くやっていけるか一抹の不安を抱えていたが、この様子なら杞憂だったのだろう。

「でね、その時に助けてもらったんだ。同じクラスのこなたちゃん、お姉ちゃんと同じクラスのたけるくんって言うんだー」

「たける？……ああ、乃木坂くんか」

加えたポツキーを上下させてかがみは脳内にたけるの顔を思い浮かべる。

「二人ともね、いい人だったよ」

「それは良かったじゃない。仲良くやりなさいよ？」

……まあ、この子からしたらみんな『いい人』なんだけどね……。かがみはそう思ったが、口には出さなかった。頭の中に浮かんだたけるが、そんなに悪い奴には見えなかったから。

乃木坂くんと、泉さんだっけ？ 二人にはまた私からもお礼言っとかなくちゃね。

日常の変わり始めとは、人それぞれである。

#### 4・色づき始めの色彩（後書き）

はい、今回は更新が早く出来ました！  
アハハハ！ 褒めてよ悟史くん！！

と、言うわけで森羅万景です。

前回のあとがきで柊姉妹と背景コンビを登場させる、と記しましたが、ちよつと長くなっちゃいそうだったのでつかさとの出会いと+で一応区切らせました。

というつかさとの出会いが長すぎた……orz

まあ、本作品はそんな感じの『アホか』と思うくらいにどうでもいいところで深い描写が魅力なんだと思います。

皆様がたけるに愛着を抱いて頂ければなぁ〜とか思いつつ次回予告。

たける『たけるです。次回は時間の流れの速さに翻弄されつつ、学園生活にも馴染みだした四月の半ば。泉さん、柊姉妹、背景コンビ

の方々と仲良くなって数日。僕の誕生日を祝ってくれるという皆様の奮闘(?)ぶりを執筆するらしいです!」

あきら『そしてなんとお!』

次回のあとがきからは“出張版らっきーちゃんねる”が始まりまーす それじゃあ皆様、ばいーにー

」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5260f/>

---

らき すた～Beautiful Days！～

2010年10月10日19時52分発行